

安楽寺だより

第31号

紙面内容

- 2面 二十二組同朋大会が開催される
- 3面 四月八日は「お釈迦様の誕生日」
- 4面 日本仏教史 明治時代(まとめ)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

二河白道のたとえ その⑤

「生きる意義を尋ねるところ」 〓 求道心

中国に出られた善導大師の『二河白道』のたとえのおはなしは、浄土を求める行者の自分への問いかけがはじまります。

この人「死を怖れて」とは、一つは、人は生まれてきたからには死ななくてはならない肉体の死です。しかし自分の死という事実を前にして、人間は生きる意義を尋ねずにはおれない存在なのです。それが「求道心」と申します。

もう一つは道心の死、求道心の放棄です。生きる意義を尋ねるところを、群賊悪獣が覆ってしまい、不問にしてしまいます。肉

死を怖れて、直ちに走りて西に向かうに、忽然としてこの大河をみて、すなわち自ら念言すらく、「この河、南北辺畔を見ず、中間に一つの白道を見る、きわめてこれ狭少なり。二つの岸あい去ること近しといえども、何によってか行くべき。今日定んで死せんこと疑わず。正しく到り回らん・



体の死と求道心の放棄という二重の危機が襲います。「直ちに西に向かう」とは、阿弥陀さまのお浄土に向かおうとすれば

「火の河」「水の河」が「大河」となって激しく襲いかかってきます。

「この河、南北辺畔を見ず」とは、わが身を縛っている煩惱は、わが身全体という「大河」であると気づかされてきます。

「白道、きわめて狭少なり」とは、煩惱の二河の激しさに圧倒されて、道幅は狭く微かです。しかし、白道は「生」の奥底、煩惱の真つ只中にはたらいで、清浄な願に生きんとするところを生み出していたのです。

「二つの岸」とは、此岸(東の岸)が煩惱に縛られた生死の世界、彼岸(西の岸)が煩惱を離れ開かれた阿弥陀さまの本願の世界であります。

「何によってか行くべき」とは、いかにして彼岸に行くことが出来るのかと、自分自身の煩惱の重さに直面してうろたえています。

「今日定んで死せんこと疑わず」とは、私は今日まちがいなく死ぬ、それは疑いようもない。この人には未来への出口は開かれてくるのでしょうか。さらに自分への問いかけは続きます。

二十二組同朋大会開催される

三月十七日、二十二組同朋大会が、百四十名の住職・ご門徒の皆様ご参加の中、開催されました。安楽寺から十五名の皆様が参加いたしました。

岡田秀規二十二組組長挨拶の後、「尾張門徒の歴史的世界」と題して、同朋大学教授・安藤弥さんにご講演いただきました。

「尾張には十五世紀後半、蓮如上人のご教化により、講を中心とした本願寺門徒集団が形成されました。本願寺門徒は、織田信長が登場し勢力を拡大する中で、長島一向一揆（一五七四年）や大坂石山合戦（一五七〇年〜八〇年）など信長と対立した時期がありました。」

受け継がれてきた尾張門徒の生活



「その後豊臣秀吉の時代になり、本願寺を継承された第十二代・教如上人は、秀吉により隠居を余儀なくされました。そして関ヶ原の戦いのあと、一六〇二年、徳川家康から京都に寺領の寄進を得て、東本願寺が誕生しました。こうした中、尾張門徒は、教如上人支持体制を確立して、地域ごとに多くの講が組織化されました。」

「江戸時代初めには、徳川幕府の命により名古屋城築城と併せて、清須から寺院移転（いわゆる清須越）が計られ、門末制度・寺請制の宗教政策が確立されていきました。

元禄時代の一六九〇年、第十六代・一如上人の時に名古屋御坊が創建され、尾張門徒や諸国の門末の尽力により一七〇二年名古屋御坊が完成いたしました。

その後明治時代に至るまで東本願寺門徒は、四度の本山再建のため、献身的に取り組みました。また尾張教学を展開させるため、学寮の設置を進め、本願寺教学の発展につとめました。

これまでの尾張門徒の歴史を振り返ると、浄土真宗の教えに帰依して、子孫に法義の相統をしてこられた先人の皆様・門徒衆の生活



熱唱されるコーラス「百歌繚乱」の皆様

に学ぶべきことが大いにあることを改めて気づかされました。」

講演終了後、懇親会を催しました。最初にアトラクションとして、二十二組有志で二年前に結成されたコーラス「百歌繚乱」の皆様「ふるさと」など二曲の歌声を聞き、その後皆様と会食をして交流致しました。（なお、百歌繚乱の皆様は、五月十二日に別院ホールで開催される音楽祭に出演されます。）

四月八日は お釈迦さまの誕生日

四月八日は、お釈迦さまの誕生日です。各寺院では、仏旗を掲げて、如来のおしえを讃える催しを行ないます。名古屋市仏教会では、毎年四月八日に中区の大須観音境内に於いて、降誕会(花祭りの式典)をつとめます。花御堂にご安置したお釈迦さまの誕生仏に甘茶をかけ、ご参拝の皆様とともに、お釈迦さま誕生をお祝いし、お釈迦さまの教えが弘まることを願う仏教徒にとって大切な行事です。

この花まつりのおはなしは、お釈迦さまの誕生を通して、人間誕生の内実を明らかにしてくださいました。

有名な『天上天下、唯我独尊』というお言葉は「いのちはすべて何ものにも勝る尊いものです。」と、お説きされておられると思います。人間が「オギャー」と叫んで生まれたという事実は、天地の神々が祝福してくださいました尊いことなのです。

人間はなぜ生まれたのでしょうか？世間一般では、「親がいるから子供が生まれる」親には産んで育ててやったという先入観があり、子には頼んだ覚えはないという意識がはたら

きます。ここに家庭での様々な争いのもとがあります。

善導大師は、『相い因つて而も生ずれば、すなわち父母あり』と申されます。人間は決して親の意識や子自身の力で生まれたのではなく、不可思議な因縁によって賜ったのちなのです。いのちの名告りと親子の関わりは同時に賜ったのです。

仏説無量寿経序文に、お釈迦さま誕生時の『吾、当に世において無上尊となるべし』とのお言葉があります。これこそ「オギャー」といういのちの叫びを表わしたお言葉といえるのではないのでしょうか

安楽寺では四月十三日の定例法話の時、花御堂を飾って花まつりを行ないます。ぜひお出かけ下さい。



名古屋市仏教会主催
降誕会の花御堂

春彼岸法要勤める

彼岸中の十日より前日まで三日間、雨の日が続いていました。

三月二十二日、八事霊園墓地で、春のお彼岸法要をお勤めいたしました。



朝のうちには小雨が降っておりましたが、八時頃雨がやんで青空が広がり、皆様にご参詣をいただきました。

永代供養墓には六十名を越す皆様にご参詣いただきました。十時三十分より墓前でお勤めをする中、皆様にご焼香をしていただき、亡きご家族の方々に想いを馳せておられました。ありがとうございました。

仏教豆知識

第三十一回



日本の仏教史

明治時代(まとめ)

仏教は、徳川時代の封建的体制のもとでの檀家制度の確立によって、次第に形式化・固定化するようになり、葬式と法会を主な仕事とする教団・教学になっていきました。

しかし、明治政府は、王政復古を表明し「天皇親政の国家・神国日本」の確立をめざしました。そのため宗教政策では、「祭政一致の神道国教政策」を推進しました。

仏教教団は、明治維新以降、明治政府の「神仏分離・廃仏毀釈」政策によって危機感を持ち、各宗派で封建体質を近代化する「仏教革新運動」が始まりました。

大谷派では、明治中ごろに清沢満之(真宗大学初代学長)が、『精神主義』運動を起し、教団によって支えられてきた封建的教學「真俗二諦説」を批判しました。この運動は、当時の拡がり一部にとどまり

仏教の近代化・社会化始まる

ましたが、知識人の中に深く浸透し、多くの人材を輩出しました。

各仏教教団での近代化は、制度の面では各宗派の中央集権化によって、中央の行政が地方・末端まで届く体制を整備し、宗議会在が設けられました。宗門教育も旧来の学寮制度を改革し、大学・専門学校や中学校が設置されました。

また、貧困救済活動や医療看護活動、育児院開設そして刑務所に派遣する教誨師の養成などにも取り組みました。

仏教事業として全国に仏教婦人会・仏教青年会が組織され、社会活動や信仰運動が行われました。しかし、社会活動は一方で明治政府の海外侵略政策を推進する役目を担うようになり、本来の仏教精神に基づく社会活動は次第に影をうすめていきました。



清沢満之(1863-1903)

四月は入学式の季節です。今年は桜の見頃が早く、新一年生の両親は少し残念そうでした。戦時中の七十数年前の入学式はどんなだったでしょう。▼先日アニメ「火垂るの墓」の映画監督・高野勲さんが逝去されました。テレビで映画を何回も観ましたが、その度に孤児となった兄妹の姿に心を強く揺さぶられました。▼「戦時中に何があったか、人はどう生きたのかを見つめてもらい、もし自分ならどう振る舞ったかを考えてほしかった」とアニメ制作の動機を語っておられました。また、高野さんは、映画を観た小学生の感想文に「皆さんが、戦争を恐れるだけでなく、将来決して戦争をおこしてはならないという決意をする人になってほしいと思います」と、返事をされたそうです。▼高野さんは、「九条の理念を持つ憲法は最も先進的、それを守ることが大切です」と常々訴えておられました。▼シリア、ミャンマーなど世界各地で起こる空爆やミサイル攻撃などの武力衝突の地域で幼い子供たちが犠牲を強いられる現状に決して無関心であってはならないと思います。昨今の「戦前の空気の流れが存在する日本」で何をすべきかが私たちに問われています。